

第3分科会「シニアと多世代がつながるために」

コーディネーター：澤岡 詩野（ダイヤ高齢社会研究財団 主任研究員）

パネリスト：

阪本 節郎（博報堂 新しい大人文化研究所 所長）

檜山 敦（東京大学大学院 情報理工学系研究科知能機械情報学専攻 特任講師）

牧 壮（牧アイティ研究所／新老人の会・スマートシニアアソシエーション代表）

澤岡 皆さん、こんにちは。私、本日のコーディネーターを務めさせていただきます澤岡詩野と申します。

皆さん、今日はお暑い中お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

まず、そもそもこの第3分科会、内閣府では、シニアと、それからICT、インターネットとかいろいろなものがありますが、このICTの活用という部分で何かテーマを設けて分科会、それからこういったシンポジウムを組むということが実は意外にも初めてのことです。皆様と一緒にこのテーマについて考えていけたらと思います。

よろしく願いいたします。

○世代を超えたつながりを考える

まず、そもそも現在の日本、皆様も御存じのように、この超高齢社会と言われております。この超高齢社会真ただ中にある日本ですが、とかく介護の問題であったりとか、高齢者をどう支えるか、こういったテーマでお話がされがちになりますが、これは高齢者による高齢者のためだけの社会ではないですよ。現行のこの社会保障制度などの維持が困難になりつつあったり、また、若者世代のこの負担が増えていく。こういった明るい話題を聞かない昨今であります。このままでは高齢世代とほかの世代との意識差が広がってしまいまして、将来的にはお互いが反目してしまう、そんな社会になっていくことも昨今では危惧されております。今後ますます高齢者世代の占める割合が高くなる中で、世代を超えたつながりを構築していくことが重要な課題になってきております。この世代を超えたつながり、この「つながる」ということは、コミュニケーション、このつながり、人と人のコミュニケーション、それもあります、価値や経験をお互いに伝え合う、そしてお互いの得意を生かして世代間で支え合う。いろいろな意味が、そしてこの可能性が内包されていると言えます。

本日皆さんにお配りしております、「Dia News」と書いてございますこの冊子、お手元にご覧いただけますでしょうか。この「Dia News」の8ページと書いてあるところ、「高齢期のつながりを補完するソーシャルネットワークワーキングサービス」と書かせていただいておりますが、これ、私が研究対象として研究をさせていただいている方々のことをまとめてレポートを書かせていただいております。この中では、会社のOB会という既知の、既に知り合った親密なつながりの中で、そのつながりをいかに長く維持していくか、そのために補助的な手段として、昨今はやりのFacebook、ソーシャルネットワークワーキングサービスの可能性について書かせていただいております。ここでは、このお写真、見ておわかりになるかと思いますが、下は60代前半、上は80代後半という、ある意味親子ほどの差のある世代間交流、その中で様々な知識や情報の共有がこのFacebookを介して常日ごろ図られています。つまり、「高齢者」と一括りにされる方々の間でも、昨今、町内会、それから老人会などの中では、若い世代の活躍を阻んでしまうこの上の世代に抵抗感を感じてなかなか若い世代が入ってこないなどといった、お互いにわかり合うことが高齢者の中でも困難になりつつあるということも指摘されています。世代がつながる、そのためには、お互いの理解を共有する、そしてお互いの理解を促進することが重要といえます。



特にその年齢差が、今は高齢者ということで例を出させていただきましたが、その年齢差が広がれば広がるほど、お互いの違いは大きくなりまして、裏を返せば、お互いの得意、持っている知識・技能も異なり、つながることが難しい反面、つながることで大きな社会の力になる可能性も秘めているといえます。この手段として、昨今高齢層にも普及著しいICT、インターネットというものが一番皆様の頭の中には思い浮かぶかと思いますが、情報通信技術の果たす可能性を、多様な主体、そして多様な世代で話し合う

機会が必要なのではないかと常々感じておりました。その課題意識、そしてその危機感から、今回の今日の間を企画させていただきました。

このシンポジウムを開催させていただく前に、我々この話題提供をさせていただく面々の中でも、ちょっと興味があるのではないかと先にも聞かせていただきますが、この中でインターネット、何か、携帯電話からメールでもいいですし、LINEでもいいですし、パソコンでGoogleを検索する、メールを送る、インターネットを使っていらっしゃる方ってどれぐらいいらっしゃいますか。手を挙げていただいて。——おお、今日はかなりの普及率ですね。恐らく今日は皆さん、そういったものを使われていて、その可能性をさらに一緒に考えてみたいなという方々なのではないかなと思われまます。今日は、かなりICTの普及率が高い方ということでお話を進めさせていただきたいと思ひます。

本日の流れとなりますが、まず前半に、このパネリストのメンバーを見て、見た目ですぐにおわかりかと思ひますが、真ん中の檜山さんは30代、そして一番端に座っていらっしゃる阪本さんは60代、そしてこちらにいらっしゃる牧さんは70代と、世代が異なります。そしてさらに、技術開発、そして研究をされていらっしゃるお立場、そしてシニアのマーケティングをされていらっしゃるお立場、そして、牧さんはなかなか御説明は難しい方ですが、私の中ではシニア企業家と位置づけをさせていただいております。企業家というお立場も、さらにこういった異なる方々に、先駆的な方々に登壇をいただきまして、それぞれの視点から、このテーマについて、まず各自20分から25分程度で話題提起をいただきます。その後、まずはこの3者間でディスカッションを行うことで、相互理解を深めたいと思ひます。その後、休憩を挟みまして、後半では会場の皆様とともに広くディスカッションを行わせていただきたいと思ひています。その際は、ただ座っているだけではなく、積極的に意見、そして疑問をぶつけていただけたらと思ひます。

では、パネリストからの御報告、そして話題提起に移らせていただきたいと思ひます。まずトップバッターは、今日は年代順ではなく、一番真ん中の阪本さん。よろしくお願ひいたします。

阪本 では、若手の60代からちょっとお話をさせていただきたいと思ひます。博報堂 新しい大人文化研究所、阪本と申します。よろしくお願ひいたします。私からは、今、この若者社会から多世代が共感する大人社会へということで、社会の大きな流れと申しますか、それはどうなんだろうということで10分ほどお話をさせていただきたいと思ひます。

○高齢社会の世界モデル

まず、最初に私の話の最後の話しにかかってくるものですから御紹介したいんですけど、これは日本、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、スウェーデン、イギリスという先進諸国の65歳以上人口の割合です。一番左側が1950年で、一番右側が2050年。100年間のこの推移を見ているんですけども、とにかく一目瞭然、世界中が高齢化をしていくということで、社会で今起こっている未来予測です。確実なのは二つあると言われていて、地球温暖化、高齢化。高齢化は政変があつても、天変地異があつても、何があつても絶対にやってきますから、とにかく世界中が高齢化をしていきますということです。

その中で日本は大変特異な線を描いていて、この下のほうから上のほうへ突き抜けていくような線の描き方、特異な線を描いている。しかも、この後で途上国とかアジア諸国が追いかけてきますので、世界中が高齢化をしていきます。ターニングポイントは2000年です。このときに、スウェーデンと同じ17%の高齢化率の国になったんですけども、スウェーデンと同じ高齢社会になったよと言われても、何かちょっとびんとこないところがあります。何かといいますと、その前の線が日本は低かったからなんですね。低いということは、日本は若い国、若者の国だったということなんですけど、2000年以降どんどんどんどん違った国になってきている。実は日本人が思う以上に世界中がこのことに注目をしています。なぜかといえば、これは先行指標になるからです。要するに、いい意味でも悪い意味でも日本がどうなるんだろうということで、特に世界中の高齢者NPOは注目をしています。したがって、日本は世界のモデルになる可能性がある、ということなんです。皆さん方がこれからおやりになろうとすることは、世界のモデルを作ることもなるということでありつつ、世界をリードする可能性も持っていると言えないのではないかなという気がするわけです。

現在総人口は1億2,000万人ですけども、20歳以上人口、成人人口は1億人、その中で50代以上人口は5,600万人ですから、もう既に大人の2人に1人が50代以上という世の中です。40代以上になりますと、7,400万人ですから、大人の10人に7人は40代以上という世の中になっているわけですね。それはびんとこないところがあるのは、やっぱり高齢化のスピードってそれぐらい速いということなんです。だからびんとこないところがある。

これが6年後の2020年には、人口は徐々に減少してきますけれども、成人人口1億人は変わりません。

この中で50代以上人口は6,000万人になりますので、大人の10人に6人は50代以上。しかも40代以上になりますと7,800万人になりますから、大人の10人に8人は40代以上ということです。6年後に、大人といえど40代以上になる世の中になるんです。わずかに6年後にそうになってしまうんです。場所によっては若者は探さないといない、そういうことにもなりかねないということで、実は最近よく言うんですけれども、未来は若者だけのものではなくなくなった。今までは、未来はイコール若者だったんですけれども、若者のものだけではなくなくなった、と言えるのかなと思いますので、ますます皆様方が社会の中心としてこれからは御活躍を期待されると言ってもいいのではないかなという気がするわけです。

○新しい大人文化の創出

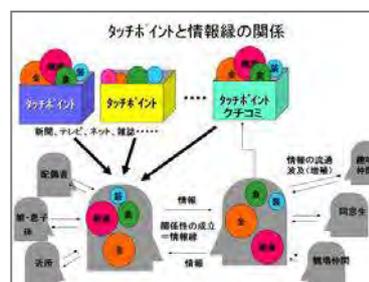
私どもは10年前から「エルダービジネス推進室」という部屋を作って、これがちょっとバージョンアップして「新しい大人文化研究所」というのを作ってこうなりました。それで、設立の趣旨がありまして、今、高齢化というのは基本的には社会的な問題として語られています。今回の増税もまさにその象徴なんですけれども、社会保障費が増えていくので増税しなければいけないということで、問題として語られています。それは、老化・高齢社会として捉えているからそうなわけですね。ところが、私どもがいろいろな調査をやったりインタビューをすると、生活者の方々は必ずしもそれを求めているわけではなくて、生活者の方々が求めているらっしゃるのは「不老・長寿社会」だということなんです。これは、同じものをどちらの側面から見るとはなすけれども、まさにその「問題」が「機会」になっていくということなんだと思うんです。そこにICTがこれからのものすごく大きな役割を果たすだろうというのは、これからお2人の先生方がお話しくださると思いますが、まさに無限の機会がここにあるということで、一般に日本の個人資産は1,100兆円と言われますけれども、その相当部分は50代以上の生活者が持つと言われていて、一説には55歳以上で70%と言われるんです。それは掛け算になると大変大きなことになるということで、高齢者文化ではなくて「新しい大人文化」が生まれるだろうと、こういうふうに言っているわけです。

○インターネットのよる「情報縁」

本日のテーマでありますインターネットなんですけれども、実は、50代半ばぐらいまではほとんど使われています。これは2004年から2012年までの推移なんですけれども、大体使われていると言ってもいいのかなと。50代以降は、やはり下がってはいきます。下がってはいくんですけれども、ただ、こうやって推移を見ていただくとおわかりになるように、伸びは非常に大きいということが言えるということですね。今日の方々も皆さんお使いになっていると、先ほど手を挙げていらっしゃいましたけれども、一般的には、男性のほうは、PC、パソコンと、それから携帯や一部の方はスマホにどんどん流れていらっしゃる。女性の方は、この年代の方々はキーボード操作というハードルがちょっとありますので、やはり携帯。特にフィーチャー・フォンと言われるガラケーが使われるような気がいたします。



実は私どもでこういうキーワードがあって、今まで高齢者という地域・血縁というふうに使われていたんですけれども、今私どもが言っているのは「情報縁」と言います。メディア情報をもとにして縁づくりをしているということです。これは、ここにあります配偶者でももちろんそうですし、それからこういった仲間でもそうなんです。新聞とかテレビとかネットとか雑誌とかといったところで得た情報をもとにして大体話をしているということで、例えばその期間だと「あまちゃん」と「半沢直樹」が話題になるといったようなことです。これが、今はマスメディア情報が主なんですけれども、これにネット情報がどんどん入ってこようとしているということだと思います。この先は、こういったマスメディアあるいは携帯、パソコンなど、新しいメディアを活用しながら、健康、環境、趣味など、関心事についての情報をメディアから交換しながら仲間づくりをするという、そういうことを指して「情報縁」と言っているんですけれども、こういうことがこれからどんどん広がろうとしているのではないかなと思います。今日のお話は、だから、これがこれから先どのように広がっていくのかということ、皆様方いろいろな議論ができることではないかなというふうに思っているわけです。



○シニアサイトの成功例

実は、シニアサイトというのがこの10年間ぐらいでたくさんでたのですが、なかなかうまくいかない

いう話があって、その中で、ある種一つだけ成功したサイトがあります。それがこの「情報縁」サイトなんです。御存じの方もいらっしゃるかと思いますけれども、DeNAがやっている「趣味人倶楽部（しゅみーとくらぶ）」という趣味のSNSです。これが非常にブレイクをしたということで、シニアサイトとは一般的には相互情報サイトを目指したんですけれども、これは趣味のSNSですから、50代頃になって、カメラとかバイクとか釣りとか、いろいろな趣味を始めました。ところが、会社の中にはそういう語れる友達がいない、そこにこの「趣味人倶楽部」で友達がたくさんいましたとか、先達がありましたということで、みんながお話しになり、月間PVが2億6,000万、会員数が30万人、UU（ユニークユーザー）92万人ということになりました。

この特徴は非常に面白い特徴なんですけれども、オフ会が非常に盛んだそうです。今、ネット上ではほとんど死語になっているんですけれども、とはいえこの世代はネット上では完結しない。「あなたですか！あなたが檜山さんですか」これが会って初めてコミュニケーションが成立するようです。必ずデジタルで完結しないで、アナログがあって初めて関係が成立するというのが考えどころかなというふうに思うんですけれども、1日80~90ぐらいオフ会をやっていると話を聞いております。

○シニア世代のメディア

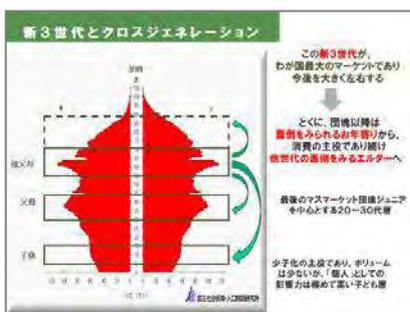


もう一つ、ではそのメディアってどんなメディアに接しているんですかということで私どもでやった調査なんですけれども、聞いてみますと、50代、60代、やはり1位がテレビで2位が新聞なんです。その後、いろいろなネットとか店頭とかロコミとかございますが、やはり50~60代は、テレビ、新聞は欠かせない。これが70代になりますと、実は新聞とテレビが逆転するんですね。全体を通してとにかく新聞、テレビだということは50代以上全てひっくり返して言えるのかなという気がいたします。

今デジタルの中でいろいろな未来やいろいろなことが語られていますけれども、その一つとして語られていることがあります。

それは何かというと、スマートテレビというものなんです。要するにインターネットとテレビが融合していくという、必然的なものなんです。特に我々広告業界ではスマートテレビになったらどうなるんだろうということが言われているわけなんですけれども、こうやって見てみると、実はスマートテレビってこのような方々が一番主たるオーディエンスといいますか、ビューアになっていくのではないかなという気がするわけです。そうすると一つ言えるのは、デジタルの中心の一翼を担っていくのではないかなというのが一つのポイントとして、お話を申し上げたいところでございます。

○「新3世代」を担うシニア世代



実は、人口ピラミッドってこんなふうになっているんですね。大体おわかりだと思ってしまうんですけれども、一つ目の出っ張りが団塊の世代ですね。その次は団塊ジュニアとなっています。団塊が祖父母に今なりかけています。今までは子供家族に面倒を見られる祖父母というのが非常に一般的なことだったんですけれども、団塊の世代からかなりちょっと様変わりをしています。団塊の世代の人たちというのは、まだ自分の親が存命だったりするわけです。では、子供家族はどうかというと、とにかく今はママが忙しいわけですから、昼間は仕事をしなければいけない、残業もしなければならぬ。そうすると、団塊の世代が孫育て、孫ケアをやっているわけです。したがって、親と孫の両方面倒を見てしまっている。

実はこの世代から「面倒をみられるお年寄り」から「他世代の面倒をみるエルダー」と、こういうふうに変化しようとしている。今日は多分、来ていらっしゃる方々は、もう70代でも多分こちら側といいますか、面倒を見る側にひよんな形でなられているのではないかなという気がするんですけれども、そういうのが今団塊世代から始まろうとしているということがあって、「新3世代」という言い方をしております。

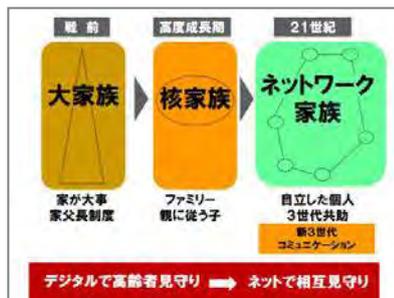
そして、結構居住スタイルが同居から近居へといいますが、お互いのプライベートの邪魔をしたくないのだけれども、でもいいコミュニケーションを持ちたいという結果が表れています。お互いにあまり踏み込み過ぎたくないのだけれども、いいコミュニケーションを持ちたいというのは、考えるときも非常に大きなポイントではないかなという気がいたします。

実際、家族形態というのが、御存じのように戦前は大家族だったわけです。高度成長期に核家族という

ふうになりました。今はネットワーク家族というふうになっていて、自立した個人だというふうなことが言えるのかなと思われま。3世代共助ということも言えるのかなという気がするんですけども、家族とのコミュニケーションの中でもメールというのがもう今や欠かせない。少なくとも携帯メールはもう欠かせないと、こういったような状況になってきて、これがどんどん進んでいく可能性があるだろうということなんです。

○ネットによる相互見守りと祖父母の役割

今、デジタルで高齢者見守りというのが言われています。この後も当然議論になってくると思うんですけども、この先はこれがどうなっていくのか。私は、この先、ネットで相互見守りということが出てくるのではないかなと思います。どういうことかといいますと、御存じの方もいらっしゃると思うんですけども、実は今、保育所には大体カメラが入っていて、ママは家にいながら今自分の子供がどうやっているのかというのを見ることができます。このようなことが保育所や何かで進んでいるんですけども、うちの会社の女性も時々こうやって見ているんですね。ただ彼女たちも会議の中に入ってはさすがに見られない。そこで私は祖父母の出番だと思うわけです。祖父母は時間がありますから、デジタルでもって子供家族のケアをしていくという、そういうふうなことがこれからどんどん始まっていく可能性というのがあるのではないかなと思うのです。これは先行きどうなるかわからないのですが、この先今度は電力系もスマートメーターとって、家電などと接続して全部管理できるようになっていきますので、そういうスマートメーターもひょっとしたら祖父母が全部家族のケアをしていくという、エネルギーを無駄遣いしないような、ケアを高齢者サイドのほうがやっていくという、そういうことが出てくるのではないかなと思うのです。



これは非常に重要なことなのでありますが、イタリアだとマンという祖母がいて全部家族って回っていくわけですね。マンがいるから大きなテーブルでばーっとみんな食事ができるみたいな、それは役割があるわけです。それから、日本でいうと沖縄のおじい、おばあなんですけれども、この人たちがいないと地域社会のことが全然わからない。だから、おじい、おばあがないと家族が成立しない。おじい、おばあに聞かないと、地域社会で生活ができないというふうに言われるわけですね。やっぱり社会的な役割を持っているわけです。だからはつらつとした人生が送れるということも言えるのかなと思います。デジタルというのがそういう役割を私は果たしていくのではないかなということが2番目に申し上げたいことであります。



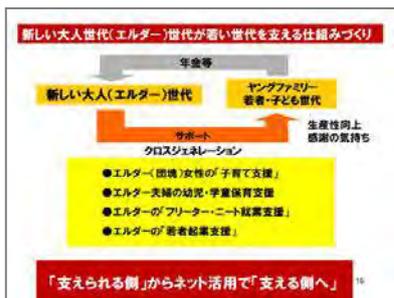
○大人世代の時代の捉え方

さらに、これは家族だけではなくて、今、40代から60代で、共感する時代の捉え方を聞いてみました。すると、「大人世代と若者世代がお互いの良さを認め合いながら交流・協力し、新しい文化や潮流を創る時代」は68%の人が共感するとお答えになっているんですね。さらに、「大人世代が若者世代を応援することで、若者世代からも新しく社会的にも意義のある文化や潮流が生まれる」。これに共感するという人も61%いるということですので、大人世代のほうは若者世代に対して交流・協力をしたいし、もっといえば支援したいのだとわかります。これは私は大変すばらしいことではないかなと思うんですね。若者世代がどう思っているかは、またもう一つ別の問題としてありますけれども、少なくとも上の世代はそう思っているということで、皆様方も非常にそういうお気持ちを持っていらっしゃるのではないかなという気がいたします。

ところが、片方で今起こっている現象は、とにかく年金の問題、賦課方式の問題がありますので、やはり若い世代がこれから高齢者を支えなければいけない、大変だということを毎日テレビで言われておりますが、ではどうすればいいのか。私は、今この反対側の回路を作っていくことが非常に重要なのかなと思うんです。例えばエルダー世代が今度はヤングファミリーとか若者と子供世代を支えていくという、もう一つの回路を作っていくことによって随分状況は変わっていくのではないかと。年金賦課方式という、それは変えるためにはまた莫大な税金がかかりますから現実的でないとしたら、別の回路を作っていくことが非常に重要なのではないかなと思うのです。

○若い世代を支えるエルダー世代のあり方

例えば、エルダー女性の子育てが非常に問題になっていますけれども、その人たちの子育てを支援する孫ケア、孫育てという、自分の子供だけではなくて、地域のそういった子育て支援に入っていく。これは



今度 2015 年から「子育て支援員」というのが制度としてもできますが、ちょうど政府の方針ができたところですので、多分こういうことも活用しながら、子育て支援が非常に期待されるのではないかと思います。特にただのベビーシッターではなくて、この年代の女性は一回子育てをした経験がありますから、それを見て若い母親の相談相手になれるということが非常に大きなポイントなんだろうと思います。そういうノウハウを生かしたらよいと思います。例えば、若い母親が仕事をして、急に残業になったときに、携帯メールで誰か助けてくれませんかというメールを出したら、「ああ、私がやってあげる」というのをメールで返して、子供のケアをしてあげるなど、

このような場でデジタルというのはすごく生きてくるのではないかなという気がするんですね。同じようにエルダー夫婦の幼児・学童保育支援、これもあるだろうという気がしますし、今は連れ去り事件という、非常に恐ろしい事件が頻々と起きていますけれども、まさに高齢者の出番と申しますか、もう独居老人をしている場合じゃないのではないかなという気がするんです。やっぱりどんどん地域の見守りをするということが求められるだろうし、そういう連絡体制の中でもデジタルはすごく大きな役割を果たすのではないかなという気がするわけです。

さらには、こういったエルダーのフリーター・ニート就業支援です。今日もこういう話が既に朝からされていましたが、自分たちはとにかく仕事をしてきた経験がありますし、雇う側だった経験もお持ちなわけですから、そういう意味では若い人に対して支援していくということもあるだろうと。さらに、若者の起業の支援ですね。今はこういった時代の中で、若者の起業は減っています。反対にエルダーの起業が増えているという話があって、エルダーの起業というのは非常にビジネスを慎重にするので失敗が少ないと言われるのですが、それを若者の起業支援に役立てていく。私どもでは「クロスジェネレーション」と言っているのですが、まさにそれができれば、若い人たちの生産性も向上するだろうし、感謝の気持ちも出てくるし、世の中の状況も随分変わってくるのではないかなという気がするわけです。まさに「支えられる側」からネット活用で「支える側」へと、こういうことが求められるのではないかなという気がいたします。

○日本を作る社会と企業

最後になりますけれども、ドラッカーさんが92歳で天寿を全うされましたが、最後に遺言のように残された言葉があって、それは「日本は再び世界をリードすることができる」とおっしゃったんです。「なぜか」というと、ほかの国に先駆けて高齢化が進展するからだ。エルダー世代が社会的な仕事に従事し、新たな知識労働を生み出すことによって達成される。特に団塊の世代が定年をするからだ。今まで会社で働いていた人たちが、例えば会社で経理部長をやっていた人が病院の経理部長をやるとか、そういう人たちがどんどん増えてくると、その次の社会を作り出していくのだ」というようなことをおっしゃっていて、ドラッカーさんは一番最後に企業とNPOのインターフェースということを盛んにおっしゃっていました。つまり、社会と企業とがいかに接点を持ち得るのかということが非常に重要でナレッジワーカーと言われる人たちが媒介する役割を非常に大きく果たすということなんですけれども、そういう人たちにリタイアした人たちがなっていくのではないかなということを言われたんですね。

「社会的なことに従事する人がたくさん出てくるような日本ができれば、日本は世界をリードできる」と。これは私が言っているのではなくてドラッカーさんが言われているんですからね。まさに、今日ここへ来られている方々は何らかの形で今社会参加をされているのだと思いますけれども、そういう方々がどんどん増えてくると、世界をリードする日本を作ることができるんだと。このようなことをドラッカーさんがおっしゃった。だからデジタルというものがかなりいろいろな機能を果たすことができるのではないかと、そんな気がするわけでございます。どうもありがとうございます。

澤岡 阪本さん、非常に力強いお言葉を、トップバッターとしてどうもありがとうございます。恐らく今、ドラッカーさんを引用して、この「知識労働」という言葉を最後に出されていらっしゃいましたが、それをどうネットを活用して具現化するかみたいなことが、もしかしたら次の檜山さんのお話に入っているのではないかなと思ったりもするのですが、檜山さん、いかがでございましょうか。よろしくお祈りします。

檜山 東京大学の檜山と申します。よろしくお願いいたします。

本日私がお話しいたしますのは「高齢者クラウド」という、皆さんのお手元に冊子があるかと思いますが、科学技術振興機構の支援をいただいた研究事業になっています。こちらは我々東京大学と日本アイ・ビー・エムの東京基礎研究所とで共同して研究を行っているものです。その研究活動の中における多世代をつなぐICTに関連する内容を本日は御紹介させていただきたいと思っております。



○シニア層による新しい社会構造

これは、2055年の日本の人口ピラミッドになっています。非常に、上が尖っていて、下がすそ野が広がって、とても安定した形になっているように見えると思うんですけども、今まで皆様が御覧になっている人口ピラミッドとどこか違うのではないのでしょうか。何が違うかというと、年齢が高いほうが下になっていて、若いほうが上になっているという形になっています。そういうふうに見ると、とても安定した、これから先も持続可能な日本の社会になっていくのではないかなど、そういうふう感じられるのではないのでしょうか。実際、現在の高齢者の方たちというのは、研究調査の報告によると、10年前よりも身体年齢が若いというようなお話があったりします。そういう意味で、超高齢社会と皆さんおっしゃいますけれども、これは実は超健康長寿社会とも考えられるのではないのでしょうか。



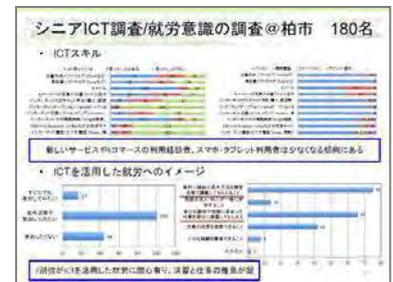
我々は、超高齢社会における問題の根源というのは、福祉とかという話ではなくて、本質的には今まで考えている少数の若者層でこの社会を支え続けていこうという、実際本来無理な図式に固執しているところにあるのではないかと考えております。65歳以上の高齢者の人たちの、8割、9割の人たちって、実は介護を必要としない元気高齢者であるという調査の結果もございます。そういう人たちに対して、社会のエンジンとして期待していない今のこの仕組みというのが大きな問題なのではないのでしょうか。本質的な問題は福祉ではなくて、ものすごい人数である元気高齢者の人たち、その人たちと社会とのつながりを維持すること、そのことが本人の健康にもつながるし、社会としての健康にもつながるのではないかと。そこで、高齢者クラウドの研究では、目指すイノベーションとしてICTをうまく活用することでシニア層と社会とのつながりを維持して、さらにその活力をいかにして社会に還元していくのか。還元していくことで新しい社会の構造を作ると、そういうふう考えております。超高齢社会は日本の強みであると、逆に世界に発信していきたいと思っています。

- 超高齢社会問題の根源
 - 少数の若者層で支えようという本来無理な図式
 - 65歳以上の元気高齢者に社会のエンジンとして期待されていない
 - 65歳以上は介護を必要としない元気高齢者
 - 超高齢化の本質的問題は福祉ではない
 - 社会とのつながりを維持することこそが健康につながる
- 「高齢者クラウド」が目指しているイノベーション
 - ICTによって、シニア層の社会とのつながりを維持し、さらにその活力を社会に還元していく新しい社会の構造をつくる
 - 超高齢社会は日本の強みである!

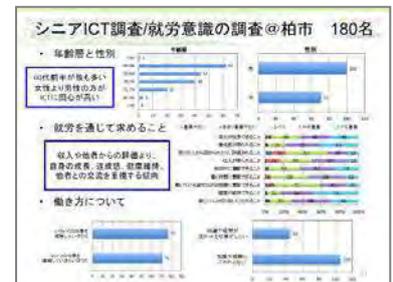
実際、シニア層にとってICTと引退後の就労ってどんなものなのだろう?

○シニア層の就労

まず、シニア層が社会につながるための一つの方法として、就労というのが社会が一番直接的に活性化する仕組みだと思っていますが、実際シニア層にとって就労という部分、それから本日のお話のテーマであるICTというものはどういうものなのだろうということの調査を行ってまいりました。



柏市で調査を行ったんですけども、東京大学には柏キャンパスというキャンパスがございまして、そこには高齢社会総合研究機構という、高齢社会を専門に研究する研究グループがございまして、そこで高齢者の就労につなげるような研究活動が進められているのですけれども、そのセミナーに集まってきた180人ぐらいのシニアの方たちに対して、ICTに関するスキルであったり、ICTを活用した就労のイメージなどについてアンケート調査などを行ってまいりました。



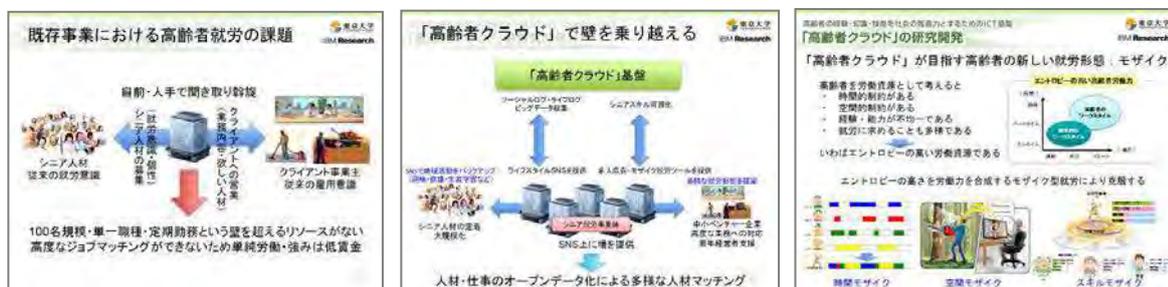
違うところというのは、インターネットを活用したソーシャルネットワークみたいな新しいサービス、それからeコマースのようなオンラインショッピングというものをされている方は少ない。また、スマートフォンやタブレットを使っていらっしゃる方も非常に少ないというのが実情であることが把握できました。

それから、ICTを活用した就労に関するイメージなんですけれども、就労したいという方は非常に多くいらっしゃるのですけれども、条件次第で、どんな条件かという、丁寧に操作方法とかを教えてもらったり、自分に合った仕事が紹介してもらえるような環境ができ上がってれば積極的に活用したいという方が7割強いらっしゃいました。

このICTに関する調査に関して、集まった方180人の内訳なんですけれども、60代前半の方が非常に意識が高くいらっしゃいます。ICTに関していうと、男性が女性よりもとても多い傾向にございました。就労を通じて求めることもあわせて調査を行ったんですけれども、現役世代のように収入とか他者から評価を得られるということが目的というよりも、自分自身が成長していくこと、それから達成感が得られること、健康を維持できる、それから他者との交流ができる、それぞれ多様な目的を持って就労していきたいというふうに考えていらっしゃいます。さらに働き方に関して、いろいろな仕事を経験したい人もいらっしゃれば、一つの仕事を一生懸命取り組みたい。今までの経験とかを生かしたい人もいれば、新しいことにチャレンジしたい人もいらっしゃるというふうに、非常に多様な就労意識を持っていらっしゃるということがわかりました。

○「高齢者クラウド」と就労形態

そこで、ICTを使った「高齢者クラウド」でどのような就労形態が提案できれば現在のシニアの意識に合った就労の仕組みがつけられるかということを考えたのが、こちらのスライドです。モザイク型就労と呼んでおります。これまでの調査を整理しますと、高齢者は若い人みたいにフルタイムで働くのも結構つらい。それだけではなくて、通勤電車が決まった場所に毎日毎日移動するというのも大変。経験・能力もそれぞれ違っていらっしゃる。また、就労に求めることも多様であるという意味で、とても多様性に富んだ、情報科学の用語で言うとエントロピーの高い労働資源であると我々は呼んでおります。そのように多様性に富んだ労働力を活用する方法として、モザイク型就労というものを考えております。



○モザイク型就労とは



このモザイク型就労というのは、1人でフルタイムの労働者1人分の仕事をしようというのではなく、複数人の力を合わせて1人分の仕事として社会に貢献していこうというものでございます。その中には3種類ございまして、一つ目が時間モザイク。これは、隙間時間をうまく活用して、空いている時間を複数人で補い合うことで1人分の仕事をしよう。次に、真ん中にあるのが空間モザイクですね。これは、今はやりのロボットとかGoogle Glassのような身につけるコンピューターを使って、インターネットで高齢者の経験・知識の豊富な方が現場の若い人に対して知識支援を行うような就労の仕方。さらに、一番チャレンジングなのがこちらのスキルモザイクというものです。時間とか空間を単純に都合よく合わせるだけではなくて、それぞれ1人1人の持っている得意なもの、それを組み合わせて合成された労働力の質そのものも高めていこうということを考えております。

○高齢者クラウドのICTの仕組みと活用

実際、既存の高齢者就労に関する事業なども各地で展開していつてきているのは皆さんも御存じのことですけれども、そういった事業者の人たちに現在どのようなところでICTの力があるとうれし

いのかというようなことも調査を行っています。現状のシニア就労のビジネスでは、仕事と人をつなぐ役割をしている仲介の事業者の中のスタッフが自分の足で稼いでシニア人材を集めていき、さらにクライアントになってくる企業などのところから、どんな仕事がありますかということで集めてくると。この仕事ならこの人が合うのではないかとということをお互いそれぞれインタビューをしていく中でつないでいくような、非常に手間がかかるんだけど、ここを一番注意してやらないといけないというノウハウのかたまりみたいな部分があるんですけども、そこを一生懸命やっつけると。そのために、あまり規模を大きくすることができないというのが大きな課題になっています。そういう意味で、100名規模とか、仕事の種類も開拓がなかなか難しいので単一の職種であったり、柔軟な働き方を目指したいけれども、やっぱりマッチングにあまり時間をかけずにできるような、定期勤務ができるような人が優先的に就労していくというような課題があるように伺っております。そこで、高齢者クラウドのICTの仕組みをどのように活用していくとその課題を乗り越えられるかということを考えてみました。

○地域のソーシャルネットワークサービス

一つは、人材を集める部分に関してなんですけれども、こちらは地域のソーシャルネットワークサービスのようなものを大規模に展開して、就労だけではなくて、地域での趣味活動とか健康づくり活動、生涯学習という、リアルなコミュニティ活動をオンライン上でまとめていくことが一つの方法ではないかと思っています。そうすることで、オンラインに1人1人の人材情報というのが集まってきますので、いろいろなシニア就労事業をやっている事業者の人たちに対して、大きな人材のプールといったものを情報として提供できるようになってくると思います。そうすることで、多様な就労事業体が集めてくるたくさんの仕事に対して、大きな人数の人とマッチングさせることができるようになってきます。その部分において、高齢者クラウドで地域活動のSNS上でのコミュニケーションのデータと仕事のデータを分析することで、どういう人がどの仕事に向いているというようなマッチングのアルゴリズムみたいなものを開発していくという、そういうことを狙っております。

実際、こちらは柏市のほうで展開していております要素技術の開発のイメージになっています。地域SNSを展開することで地域での高齢者の人たちの交流を活性化させていく。その交流の情報から、どういった人がどの場所にどれくらいいるんだという人材情報というものを集めていくのが一つの方法です。

逆に、就労の部分に関してなんですけれども、先ほどの時間モザイクである、例えば農業における突発的な作物の世話をするような仕事に対して、隙間時間の空いている人が集まってその作業をやるようなことをする、時間調整のためのソフトウェアのツールの開発を行ったりとか、遠隔から仕事をするような、ロボットを活用したような空間モザイクの仕組みをつくったりしています。それらの仕事の情報とかを集めて、最終的には人と人材をマッチングしていく仕組みを考えてたりしています。そういうことを研究の全体像としてはやっているのですが、その中で世代間をつなぐ部分に関する要素技術の紹介をここからはやっていきたいと思っています。

○音声読み上げ図書での取組

一つ目なんですけれども、こちらは昨年からずっと続けてきている、日本点字図書館における音声読み上げ図書を高齢者と若者が共同して作業するような仕組みを展開しております。これは「みんなでデージー」と呼ばれるものです。この音声読み上げ図書というのは視覚障害者の人たちに対して、視覚障害者の人たちが自分で本を読めるようにするための電子図書を作っています。どういうふうに作っているかというと、本をまずスキャンをして、スキャンした文字情報を機械で認識させます。この機械で認識させた状態では、認識の間違いというのがたくさん含まれています。それを高齢者と若い人が協力をし合って間違いを訂正していったら、最終的に視覚障害者・読字障害者の方たちにその電子図書を届けるという仕組みになっています。ここで、高齢者の方というのは、本の中にある難しい漢字の読みだとか、そういうのは知識が豊富でいらっしゃるのと、あと作業が非常に丁寧に長く続けてくださるというシニア独特の特徴がございます。逆に、若い世代に関してなんですけれども、あまり漢字の知識がないので難しい認識の間違いの修正はできないものの、迅速にすごい量を瞬間的にこなすことができるという若い世代の特徴があります。そういう意味で、正確さとスピードという意味での世代間の助け合いモデルで仕事をやっていくというイメージになっています。

